

協力場面で人はどのくらい他者に影響されやすいのか？

○ 藪田みな美¹・中西大輔²

(¹ 広島修道大学大学院人文科学研究科・² 広島修道大学健康科学部)

目的

人は大規模な社会においてなぜ協力関係を構築できるのか、多くの研究者がこの問題に挑んできた。本研究では、匿名的な状況下でも協力行動の説明ができる、多数派同調バイアス (Boyd & Richerson, 1985) に注目した。多数派同調バイアスとは、集団内の多数派の行動を高確率で模倣する傾向のことである。多数派の協力行動に対して敏感に反応することで、内集団協力率が上昇する (Boyd & Richerson, 2005)。しかし、この妥当性は十分に検証されていない。本発表では、社会的ジレンマ場面を用いて、多数派同調バイアスの存在の有無を検証してきた一連の研究を紹介する。

方法

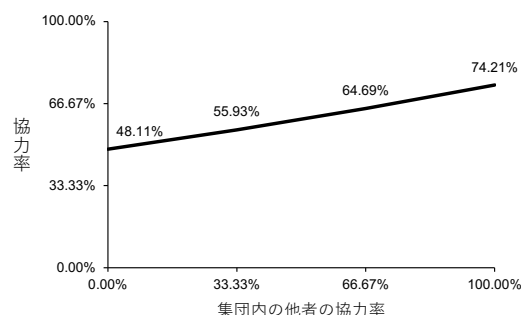
実験 1 (日常場面) 参加者 ($N=159$) は、社会的ジレンマの条件を満たす 14 の日常的シナリオ (e.g., 献血が求められる状況) を読み、それぞれの状況で自分なら協力するかどうか回答した。その後、同じシナリオの内容について、4 つの社会情報 (i.e., 内集団協力率が 0%, 33.3%, 66.7%, 100%) が同時に提示された上で、それぞれ協力するか否かに回答した。

実験 2 (実験場面: 参加者内/参加者間要因) 参加者内要因では、参加者 ($N=157$) は社会的ジレンマの実験に 100 人が参加しているというシナリオを想像することを求められた。その上で、各参加者は元手の 1,000 円を寄付するかどうか回答した。次に、実験 1 と同様に、4 つの社会情報が同時に提示された上で、それぞれ寄付するか否かに回答した。参加者間要因 ($N=145$) では、4 つの行動情報のうち 1 つをランダムに提示された上で、参加者は寄付するか否かに回答した。

結果

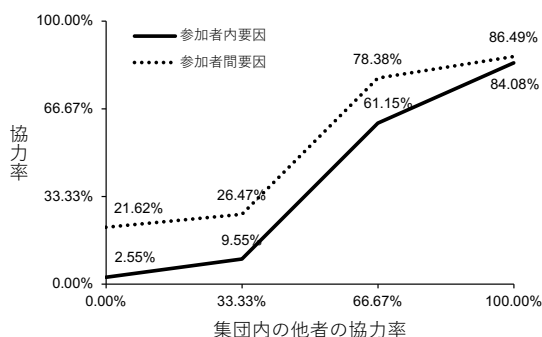
実験 1 Eriksson & Coultas (2009) が開発した指標 D^* が正の値になれば多数派同調バイアス (S 字型) が示されたことになる。ブートストラップ法 (100 万回) で D^* が有意に正になるかを検証した結果、全てのシナリオにおいて D^* の 95% 信頼区間に 0 が含まれていたことから (95% CIs [-0.61, 0.83])、多数派同調バイアスが観察されなかった。

図 1. 実験 1 の 4 パタンにおける協力率 (14 シナリオにおける平均協力率を示す)



実験 2 実験 1 と同様に分析した。その結果、参加者内要因でも参加者間要因でも、 D^* の 95% 信頼区間には 0 が含まれていなかった (参加者内: 95% CI [1.16, 2.12]、参加者間: 95% CI [0.60, 3.40])。したがって、多数派同調バイアスが観察された。

図 2. 実験 2 の 4 パタンにおける協力率。



考察

日常的な協力場面では多数派同調バイアスが観察されなかったのに対し、実験的な協力場面では多数派同調バイアスが観察された。この違いが生じた理由として、日常的な状況では普段の経験により自身の行動が一貫されているのに対して、実験では普段経験することがないため、多数派に影響されやすかった可能性が考えられる。今後、どのような状況下であれば多数派同調バイアスが観察されるのかを特定する必要がある。

謝辞

本研究を実施するにあたり、横田晋大先生 (広島修道大学) から有益なご助言をいただきました。ここに記して感謝いたします。